

「芦別調査」のもたらしたもの ——地域史とその解釈の交錯する地点

A gift of intensive field survey in the Ashibetsu region
— crossing point of local history and its interpretations

井 上 博 登

こだわりの「芦別本」

産炭地研究会（JAFCOF）は、これまで日本国内各地及び海外の産炭地域において、社会学や経済史の専門的知見に基づき、多様な観点から調査研究に取り組んできた。同研究会はすでに複数の共編著を出版しているが、本稿で論じる『芦別—炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』（嶋崎、西城戸、長谷山 2023, 寿郎社）もその研究成果の一つであり、おもに 2014 年以降に実施した芦別での本格的な調査に基づいている（嶋崎、西城戸、長谷山 2023, pp.15-pp.16）。以下では、同書の構成や内容、特色について述べる。

同書は、産炭地研究会の研究者と長谷山隆博氏（芦別市星の降る里百年記念館元館長、学芸員）による共著で、芦別の炭鉱町としての側面を星の降る里百年記念館所蔵資料や関係者への聞き取りによって調査し分析したものである。各章は 9 名の著者それぞれの専門的な視点から分析され、それぞれの論考が相互に関連・参照されながら一冊の本としてまとめられることにより、詳細で具体的な「炭鉱のマチ・芦別」を描き切っている。

管見の限りでは芦別をテーマにしたこれだけ大部の著作はなく、近年では、産炭地域の一つの町についてこれだけの多様な側面から分析してまとめた著作も記憶になく、同書の希少性は際立っている。

まず冒頭では「写真記録 昭和の芦別」（長谷山隆博編）と題して、芦別市制施行（1953 年）から昭和の終わり（1988 年）までの時代の写真が 100 枚、長谷山氏による詳細な解説とともに掲載されている。写真はおもに芦別市広報課が撮影したもので、上記の期間中のすべての年について写真が掲載されており、複数枚の写真が掲載されている年はあるものの、写真が抜けている年はない。

本編の構成は、【芦別の炭鉱と労働者の移入・定着・移出】、【芦別における炭鉱労働】、【芦別の地域産業と地域活動】という 3 部構成から成り、各章は執筆者の専門や関心に従って、「樺太引揚者の足跡」「炭鉱の学校と子ども」「事故災害報告」「三井芦別労働組合」「芦別市人名鑑の分析」「炭鉱主婦会・婦人会、生活学校」などのテーマで、調査に基づく分析がなされている。その他、さまざまなテーマ、内容のコラムとして 13 編が収録されており、おそらくほとんどの読者がはじめて知ることになるであろう微に入り細を穿つ芦別の歴史が記載されている。

内容もさることながら、同書を手にとってひしひしと伝わってくるのは、装丁やデザイン、写真の選択と配置等ににじみ出る制作側の意気込みである。B5 判の表紙に大書された「芦別」の二文字はひと際目を引き、渾身の一作であることを想起させる。ページを繰れば、炭鉱の奥深さをイメージするモノトーンのデザイン、要所に挿入される複数の鳥瞰写真はそれ自体が貴重な情報源であるとともに、このマチが何であったのかを雄弁に物語る。

この制作側のこだわりこそが、同書の放つ圧倒的な存在感の所以であろう。

誰に向けて書かれ、何をもたらすのか

『芦別—炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』が、産炭地研究会メンバーによる集中的な「芦別調査」の成果として世に出されたことは冒頭に述べたとおりである。以下では同書の刊行が芦別にもたらすもの、つまりその意

義について考察する。その際、意識するのは同書は誰に向けて書かれ、何をもたらし、どのような人たちが手に取るのかという点である。

まず、当然ながら現在芦別市に暮らしている人たちには、一番に手に取ってもらいたいということがあると思われる。刊行記念シンポジウム（2024年3月3日開催 於：芦別市立図書館）には多数の参加があったが、地元の方も大勢参加していた。そしてそれに留まらず、同書の特徴として「芦別に移住し、芦別で働き、暮らし、そして芦別を去った膨大な人たちの足跡〈フットプリント〉」（前掲、pp.16-pp.17）への視点があり、おそらく現在芦別に住んでいる人たちの人数よりもはるかに多い、これらの関係する人たちにも手に取って読んでももらいたいという意図が含まれているに違いない。

同書は、現在芦別に居住している人には、近いけれども詳しくは知らなかったもう一つの芦別の姿を提示する。そして、芦別を去った人たちには、自分たちがこの土地で暮らし、過ごし、また別の場所へ転出していくという、家族の歴史から地域の産業、国策の転換等々時代との関わりやその大きな意味について示唆し、それらについてさまざまな角度から知ることが可能になるであろう。

つまり同書は、炭鉱町芦別の過去をひも解いて具体的な実像を描くことによって、地域産業の大きな変化や人口の激減等、芦別がこれまでに経験した時代の荒波の背景と意味を教えてくれるのである。

資料の制約とその乗り越え方

同書では、研究で依拠した資料群の性質や制約について随所で触れられている。「炭鉱遺構や炭鉱会社や労働組合の公的文書資料のアーカイブもごくわずか」（前掲、p.17）であるものの、「百年記念館や芦別市立図書館郷土資料には、驚愕するほどの数の学校・組織・団体の「周年記念誌」が並んでいる。（中略）すでに解散し消滅してしまった組織のフットプリントが、そこに関わった人びとの経験として蓄積され、深く刻まれている」（前掲、p.17）のである。同時に、これらの資料群に相対して「捉えどころのない資料群をどのように研究対象として抽出するか、その方向性を見極めるまでに相当の苦労を要した」（前掲、p.303）とあるように、直面したのは「芦別のとらえどころのなさ」（前掲、p.16）であったという。

現状でアクセス可能な資料に依拠せざるを得ない以上、資料調査に基づく研究が一定の制約を受けることは当然であるが、この「芦別調査」も例外ではなかった。つまり、食材を使った調理に例えれば、あらゆる食材や調理器具を自由に使える中で最高のメニューに挑戦するというような条件ではなく、あらかじめ使用できる食材や道具が限られた中でどれだけ美味しい料理を作ることができるのか、という試みに近かったであろうと推測する。

ただし、そこからが料理人の腕の見せ所といわんばかりに、同書の各執筆者はこの資料上の制約を乗り越え、それ以上に意識的に逆手にとって限られた資料の中でどのような分析ができるのかという点に果敢に向き合っている。

たとえば、第8章「三井芦別労働組合と精妙な賃金体系」では、当初組合の刊行物にあたった段階では「拍子抜け」の感覚」（前掲、p.221）とあるものの、そこから、他炭鉱から移ってきた方への聞き取りや、賃金体系に関する資料にあたる中で、他炭鉱の事例と比べた中での「賃金決定の複雑精緻なシステム」（前掲、p.228）の実態を、各方面に配慮を凝らしつつ明らかにしている。

また第9章「炭鉱町から地方都市へ」では、あえて芦別固有の資料ではなく、他の地域であっても入手可能である「国勢調査」の調査データを使った分析という手法で、戦後の芦別市の地域産業構造と社会移動の変遷を論じている。このアプローチが有効であるならば、芦別を事例とした調査結果を他の産炭地や地域のものと比較検討することが可能となり、地域固有の資料上の制約を乗り越えることが部分的には可能になる。本章は先述した「限られた条件」を乗り越えるべく、その方法論に意識的に取り組んだ成果であるように感じられる。

よこ糸としての「自治体史」たて糸としての「研究書」

同書の成果について長谷山氏はあとがきで、「芦別市史とは違う視座から、炭鉱という産業社会構造を通じて芦別市の歴史に肉薄」（前掲、p.304）したと記している。以下では同書を通読して考えさせられた、いわゆ

る自治体史、市町村史、郷土史誌の類と、同書のように外部の研究者によって著された研究書の類との違いや相互補完性、相互関係性等について記してみたい。

同書を通読して感じたことは、資料に基づいた非常に具体的で詳細な記述や分析がなされており、それゆえにここで分析されているようなことは地域の人たちでもなかなか知らないことなのではないか、つまり地域で共有されている芦別全体の歴史やイメージとのギャップがあるのではないかという点であった。同書はいうまでもなく「炭鉱の町」としての芦別の側面について、地域資料を丹念に読み解き分析と解釈を施して深く掘り下げた著作であり、芦別市全体を網羅的に取り上げたものではない。

いわゆる「市史」の類が、その時点での利用可能なあらゆる雑多な資料に基づいた、その地域の網羅的な記述であり、特定の視点によらないストレートで全体的な情報の提示だとすれば、同書はまず芦別の町を「炭鉱」というキーワードで括ることを始点として、そこからアクセス可能で使用に耐えうる資料群を抽出し、その資料の分析を通して芦別という町を描き出している。資料を使いながらそこに「分析と解釈」を加えて論じるという部分が要諦であり、それは単に今まで知らなかったことを知る、という次元を超えて、史実や事象の意味、実際に起こったことの意味や背景について説明し、理解することができるのである。

いわば「市史」の類は「よこ糸」であり、この同書「芦別本」が「たて糸」となり、それによって編み出されるのが芦別の多様な地域像ではないだろうか。そして、このいくつもの異なる視点を重ね合わせることによって浮かび上がる地域像は、外部の大学研究者と地域の学芸員（長谷山氏）が出会い共鳴し、相互作用を働かせることによって形となった。その要の役割を果たしたのが地域の博物館（芦別市星の降る里百年記念館）であり、長谷山氏の長きに渡る仕事の蓄積であったといえよう。

長谷山氏の仕事に対するポリシーは明確である。

「いつ、だれが、どんな目的で記念館の資料を探索に来るか予想はつかないが、何らかの疑問を解決したくて突然の訪問者が現れても、その学習要望に即応できる態勢を整えておくこと」（前掲、p.303）

平成の終わりから令和にかけて、10年近くに渡る研究者と地域との交流の結果が同書の刊行として結実し、まさに芦別の「足跡」の一つとして末永く記憶と記録に刻まれることを願いたい。

（参考文献）

『芦別—炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』（嶋崎尚子、西城戸誠、長谷山隆博編著 2023 年、寿郎社〔札幌〕）